

第17回 ちゅうでん教育振興助成（平成29年度）

報告書資料 一般 - 29

学校名・団体名	南魚沼市立北辰小学校
HPアドレス	http://www.minamiuonuma.ed.jp/~hokushin/
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	子どもの感性を磨く生徒指導の推進
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>道徳を中核にして、児童の心を育てる活動を推進する。児童の自尊感情を高めるために、道徳の充実に加え、総合的な学習や特別活動等を中心に、学校機能の総力を挙げ教育活動を改善する。</p> <p>学校支援地域組織「辰の子応援団」を核に、地域と連携した取組を実践し、地域全体で子育てを推進するという体制を構築する。これらの取組を通し生徒指導上の諸問題の解決につなげる。</p>	

1 実践内容＜活動時期および内容＞

①生き方教育の実践（9月～12月）**高学年**

学校支援組織「辰の子応援団」を中核に、地域の人材を発掘し、「ようこそ先輩」の授業実践をした。人生観を語っていただき、努力することの大切さなどを指導した。5年生の自然体験教室では市内の中山間地に居住し、過疎化のため限界となりつつも、その維持発展のために尽力している方々を講師に道徳の授業を展開した。また、校区在住の社会体育指導者を講師に実技指導を受けながら、児童のためにひたむきに貢献することの尊さを学び、地域発展にかける願いを学んだ。



地域の方から生き方を学ぶ

②啓発型学校だよりの発行（4月～3月）

全校児童、保護者、地域

従来の学校だよりを改善し、子育てについて深く考えていただくような内容の学校だよりを発行した。月2回の定期発行と学期初めと末の臨時発行を合わせ、計26回発行することとした。主な内容として、子育ての在り方等を話題にした校長の教育観を基にしたエッセイ風に編集した。難解な教育用語は用いず、祖父母からも気楽に読んでもらえるよう工夫した。また、読みやすくするため12ポイント以上の大きなフォントとするなど紙面構成も改善した。

③児童が自由に自分の思いを書き綴る「辰の子ノート」の取組（9月～2月）**中学年・高学年**

児童の作文活動で意見文として道徳的な内容を書かせ、児童の発信力を育んだ。文章化し客観的評価を得ることで、自己有用感の向上につなげた。従来の取組に意味づけし児童の「書く」目的を明確化させた。

④地域で企画する自然体験活動（7月）**全校児童**

・学校支援地域組織「辰の子応援団」が八海山登山を主催した。学校行事として実施することが困難な取組を、学校支援地域組織が主催したことで、学校の取組を補完することができた。自然と触れることで親子の絆を深め、自然への畏敬の念を深めることができた。**高学年**

・学校田や野菜の栽培活動を通し、協力して作業に取り組むことの大切さや食物を得ることの大切さに気づかせた。現在、大豆を栽培し味噌を作る活動に発展している。地域のその道の達人を招聘し、親子で活動に取り組んでいる。**全校児童**

⑤保護者による学習会 PTAと連携して取り組む講演会の実施（9月～12月）**保護者**

・子育てに悩む保護者等に実践的な内容の「子育て学習会」を4回開催した。（保育園へ出向いた学習会3回、自校保護者対象1回）。

⑥道徳の授業改善 管理職による道徳のTT授業（7月～2月）**全校児童**

全学級で子どもに自尊感情を高めていく道徳授業を管理職がした。管理職が直接授業をすることにより、全校体制で道徳に取り組んでいることを、児童や保護者に理解していただき、心を育てることの重要性を認識してもらった。管理職が授業をすることによって、児童はより重く受け止め、子どもが大きく変わるきっかけとなった。校長が全学級で道徳の授業をすることをカリキュラムに位置づけ、担任と連携して学年毎のテーマを決め授業実践した。児童の発達学年に応じた内容に設定できたことで、全校朝会の講話よりも、より児童の実態に即した内容となり、児童の心に響く学習となった。

また、この取組の結果、一人一人の児童の特性を直接管理職が分かることにより、より円滑な生徒指導の実現につながった。生徒指導に関する情報交換会（通称「子どもを語る会」）でも、管理職が担任の考える生徒指導上の諸問題を、担任の立場で具体的に把握することができ、問題の所在と打開策を迅速に協議することができた。結果として児童の不適切な行為等の未然防止につながり、児童間の人間関係を良好に維持することにつながった。

⑦児童の心にふれる本の読み聞かせ（7月～2月）**全校児童**

児童に教師が読み聞かせたい本を厳選し、読み聞かせを実施した。読み聞かせたい本の内容を命に関わる内容、生き方に関わる内容、人間関係に関わる内容に厳選した。管理職が読み聞かせたい本を厳選し、全学級で読み聞かせを実施した。また、担任も積極的に読み聞かせをし、「教師が読み聞かせをしたいこの1冊」を準備した。この活動を通して、子どもの感性を養うことにつながった。

例えば4年生では、「ママのおなかを選んできたよ」（池田明、リオン社）を読み聞かせた。管理職の児童への願いに沿った本を読み聞かせることで、児童に対する思いを直接伝えることができた。その結果、担任とは違った視点から直接児童の感性に訴えることができた。

⑧障害理解教育の推進**全校児童**

特別支援学校との交流を「スペシャル・オリンピックス・スクール in 北辰 2017」として全校児童が関わり推進した。6月27日「SO スクール 2017 北辰」を開催した。SO スクールとは、スペシャルオリンピックスのスクール版である。南魚沼市内の各校の特別支援学級で学ぶ児童と市立総合支援学校の児童が参加した。県 SO 協会と連携し、多くのボランティアによる協力者を要請した。その後も総合支援学校との交流が継続・発展し、心を育てる有効な策となった。具体的に児童が活動を通して学んだ内容は、自尊感情の高揚、懸命に生きることの理解、人間の尊厳、障害理解、合理的な配慮等である。さらに、どのような相手でも互いに尊重し合い、受容していくことの大切さを学んだ。県の重点事項の「豊かなこころをはぐくむ教育の推進」につながる実践となった。



本の読み聞かせの様子



SO スクール競技風景

2 成果

①児童の変容

児童の変容についてQ-U調査結果、生徒指導上対応した教育相談数、学校評価からの数値にどのように反映されたのか調査した。結果は、前年度同時期よりも10ポイント以上生活満足群児童が増加するなど良好な数値を示した。また、教師が受け止める感覚的な評価も良好であった。授業中の立ち歩きや不適切な行為は皆無であり、安定した授業が日常的になされている。教師が生徒指導上の対応から解放され、本来の学力向上に向けた取組に集中できている様子が分かる。

②保護者の変容

人間関係のトラブルの発生時、保護者は当事者として事案の渦中にあり、目の前の事態に対処することで精一杯である。そのため、啓発的な内容を伝えにくい。平穏な状態の時こそ保護者啓発の機会をとらえ、保護者学習会を開催した。その結果、母子分離不安等の諸問題の客観的理解が深まり、万一自分の子どもがなくても必ず対処できるという認識が変わってきた。また、母子分離不安による登校渋り等の未然防止策も講じられるようになった。また、児童のけんか等の人間関係の不適切性への対応についても、保護者としてすべきことを事前に理解してもらうことにより、解決へのシナリオを保護者自身が描けるようになってきている。その結果、保護者も安心して子どもとかがかわれるようになってきている。

③地域全体で子育てを推進するという基盤形成

いじめや不登校などの喫緊の課題の根絶のためには、地域全体で子育てを支援するという、地域と共に歩む学校づくりが極めて重要である。今回の取組では、学校支援地域組織「辰の子応援団」と緊密に連携し、事業実践に取り組んだ。その結果、地域全体で子育てを推進するという機運の醸成が進んだ。これらの一連の取組の結果、次年度学校支援地域本部への認可の見通しとなった。